

## ユマニストによる権威の再構築—アラン・シャルチエの対比列举をめぐって

影山 緑子

13 世紀のキリスト教支配下にあつて、賛否両論ありながらも、パリ大学の学芸学部ではアリストテレスは中心的権威 *auctoritas* として教授されていた。J・アメスは、『アリストテレス権威選集』の序文において、アリストテレス哲学が学芸学部のカリキュラムに組み込まれるに至る経緯を大まかに述べている。1210 年、1215 年にアリストテレスの自然哲学は、パリの教会会議では教えることが禁じられたにもかかわらず、アリストテレス哲学の教育や注釈は続けられていた。そのため、パリ大学の新カリキュラムの中で 1255 年に正式に全作品が教授されることが容認される。そのほぼ 10 年後には、アリストテレス教授法には 3 つの潮流ができる。第一は、アヴェロエス注解の影響が強い非正統派の革新的解釈を基礎とする、ブラバンのシゲルスを中心とする潮流。第二は、スコラ学派トマス・アキナスの比較的穏健な字義的解釈の膨大な注釈を基礎とし、後に主流となる。第三は、アリストテレスに精通しながらもフランチェスコ会派神学博士として論じた、聖ボナヴェントゥラの潮流である。1277 年には、再び当時のパリ司教エティエンヌ・タンピエによって、非正統派が糾弾されたが、一方で 1366 年の教皇特使による改革によって、学芸学部におけるアリストテレスの自然哲学や形而上学の必要性が重視されることとなる。

さて、F. ルイによると、制作年代 1429—1430 年頃とされる、アラン・シャルチエ (1385 年と 1395 年の間—1430 年) の『希望の書』には、歴史上の哲学者、賢者、著名人物など固有名詞が頻出する。『希望の書』に引用された数々の固有名詞の中で、特に二箇所で人名、時には書名も伴って列举されている節がある。第一は、三大神徳のうち「信仰」のアレゴリーによる列举、英知に優れた政治家を養成するために知っておかなくてはならない、賢者—プラトン、サロモン、ユリウス・カエサル、アヴィケンナ、アヴェロエス、プトレマイオス、ミトリダテス—とその作品名である。中でも、ポントゥス王ミトリダテスは作品中、数箇所にわたって扱われている。第二は、「希望」のアレゴリーが教訓説話 (*exempla*) を学ぶ手掛かりとして薦める、歴史家の名前の列举である。本発表では、第一の「信仰」による賢者のリスト、ユダヤ・ヘレニズムの系譜となる権威の列举を対象とし、七自由学芸との関係性を念頭に置きつつ、まず人名に付加される形容詞句、呼称について検証した。

一方、『希望の書』の制作に先立つ 1423 年には、英摂政ベッドフォード侯の下でルーヴル城の書庫の目録 F (L. ドゥリール目録記号による) が作成された。アラン・シャルチエの賢者と作品名の列举の前には、そのシャルル 5 世の書庫と関連づける記述、エジプト王プトレマイオスの創設したアレクサンドリア図書館の蔵書への言及も認められる。クリスティーン・ド・ピザンの『賢王シャルル五世の行いと美德の書』(1404 年頃) には、優れた著書や編纂書の収集と書庫の保管の様子が描写されている。目録については、19 世紀の図書館研究を中心に、場合によっては写本を参照し、ルーヴル城の三層に分かれた書庫の配置と、特に天文学関連の列举された作品名との照合を行った。書庫番から司書へと役割

を転換させていったジル・マレーによる目録Aによると、天文学関連のラテン語書物は最上層に収納されている。月村教授のシャルル五世の図書室に関する先行研究も参照すると、学問上のヒエラルキーにおける位置づけや装丁と無関係ではないことが判明した。アラン・シャルチエの権威の列举には、編纂の意図も認められる。

また、『希望の書』I 写本(BNF. fr. 126)において賢者の列举の冒頭にある表現「神のごときプラトン」には、ペトラルカによるプラトン評価の影響も否めない。後半では、1380年代からペトラルカやボッカチオなどトレチェントのイタリア・ユマニストの影響を受けたパリの初期ユマニストとの関連について論じた。初期ユマニストと呼ばれる人々は、ナヴァール学寮に属していたジャン・ド・モントルーユ、ゴンティエ、ピエール・コル兄弟、ニコラ・ド・クラマンジュが中心となっている。彼らと交流のあったロラン・ド・ブルミエフェがフランス語に訳したボッカチオ『貴人の変転の出来事』(P・メイ・ギャザーコー校訂版を参照)は、『希望の書』に著者と書名が引用されている。同書のロラン・ド・ブルミエフェによる序文には、《Alain le poete》という記載がある。従来、アラン・ド・リルとみなされてきたが、アルスナル写本 5193 については、アラン・シャルチエを指しているのではないかと推測される。

没後引用される場合には、必ず「先生 maître」という呼称がつけられ、雄弁家、詩人として自身が権威の一人となる。そのアラン・シャルチエと初期ユマニズムの視点から、中世末期の学芸学部の“権威”の様相を捉え、権威の再構築について分析した。